

# マクロ的に見た 「倭国から日本国へ」

2026年3月28日

橘高 修

# I

**日本列島に存在した  
国家or王朝or集団**

# 出雲・九州・畿内と 吉備や丹後や越前や尾張などの 有力な勢力との関係

出雲・九州・畿内だけではなく、  
吉備・丹後・越前・尾張などの有力勢力を含めた  
「列島全体の多元的政治構造」

# 1. 列島は「単一国家」ではなく、 複数の地域国家の集合体だった

- 九州（邪馬台国・倭の五王の中心）
- 出雲（山陰の海上ネットワーク国家）
- 吉備（瀬戸内の巨大古墳文化圏）
- 丹後（日本海交易国家、王墓級古墳）
- 越前（北陸の海上勢力、渡来系文化の中心）
- 尾張（東海の軍事・交易勢力）
- 畿内（後発のヤマト政権）

## 2. 各勢力の概要①

### 出雲

山陰海上ネットワークの宗教・政治中心

- 荒神谷・加茂岩倉の青銅器群
- 国譲り神話 = 政治的服属の神話化
- 倭国連合の一角だった可能性

### 九州

倭国の中心（卑弥呼・倭の五王）

- 魏志倭人伝・宋書倭国伝の舞台
- 白村江敗戦まで強力な政治中心
- 記紀は九州の政治史をほぼ削除

## 2. 各勢力の概要②

### 吉備

瀬戸内の巨大勢力

- 箸墓古墳に匹敵する規模の古墳群
- 吉備津彦命の神話 = 征服の物語
- 鉄器生産・軍事力・海上交通の中心

### 丹後

日本海交易国家

- 網野銚子山古墳・神明山古墳・蛭子山古墳などの巨大古墳
- 渡来系文化の集積地
- 丹後王国（丹後王墓群）  
と呼ばれる独自勢力

## 2. 各勢力の概要③

### 越前

#### 北陸の海上勢力

- 渡来系技術者・工人の集積
- 北陸道の軍事・物流拠点
- 出雲・丹後と連動する日本海ネットワーク
- 大宝律令以降は北陸道の要衝として重視

### 尾張

#### 東海の軍事勢力

- 尾張氏は武器製造・軍事力で突出
- ヤマトタケル神話 = 尾張との婚姻関係
- 熱田神宮 = 三種の神器の一つ（草薙剣）を保持

## 2. 各勢力の概要④

### 畿内：後発の政治勢力（最終的な統合者）

- 古墳の巨大化は4世紀後半以降
- 九州・吉備・出雲・丹後・尾張を吸収
- 記紀で「万世一系」の物語を構築

→ 列島の多元勢力を統合して“日本国”を形成

# 3. 倭国と日本国の関係を この枠組みで再解釈すると？

- 倭国 = 九州中心の広域連合国家 (3～7世紀)
- 日本国 = 畿内中心の中央集権国家 (7世紀後半～)

その間に、

出雲・吉備・丹後・越前・尾張などの地域国家が  
連合・対立・婚姻・征服を通じて統合されていった。

**倭国→日本国の転換は、  
列島の多元勢力がヤマト政権のもとに統合される  
「国家形成のプロセス」だった。**

# 7世紀までに存在した 「列島の有力勢力」一覧

地域	勢力	特徴
九州北部	卑弥呼政権・倭の五王	列島最大の政治中心
九州南部	狗奴国・熊襲・隼人	独立勢力、ヤマトに抵抗
山陰	出雲王権	宗教・海上ネットワーク国家
瀬戸内	吉備王権	軍事・物流の超大国
日本海	丹後王国	渡来文化・外戚ネットワーク
日本海	越前勢力	技術・交易の中心
東海	尾張勢力	軍事・祭祀の中心
畿内	ヤマト王権	最終的な統合者
東北	蝦夷勢力	独立国家群
北海道	オホーツク文化圏	別文明圏
南西諸島	古代琉球勢力	南島の独立勢力

## Ⅱ

# 神話から見る大きな流れ

# 国譲りと天孫降臨と神武東征

記紀神話において、  
高天原勢力は出雲に「国譲り」をさせた後、  
九州へ「天孫降臨」している。  
出雲政権の後、高天原勢力が九州に進出したと  
とらえることができる。  
天孫降臨の後、神武東征の物語が描かれる。

# 1. 神話の順序は 「政治勢力の移動」を象徴している

## 記紀神話の流れ

(国譲り) 出雲の大国主が国を譲る

(天孫降臨) 高天原勢力が九州に降臨する

(神武東征) その後、東征して畿内へ向かう

## 2. 歴史的再解釈

# 出雲政権 → 九州政権 → 畿内政権

### ① 出雲政権 (山陰)

弥生～古墳初期にかけて、  
出雲は強力な青銅器文化と  
海上ネットワークを持つ政治体だった。  
記紀が「国譲り」として描いたのは、  
出雲政権の衰退・服属の記憶  
と考えられる。

### ② 九州政権 (倭国の中心)

卑弥呼、倭の五王、多利思北孤など、  
3～7世紀の倭国の中心は  
九州にあった可能性が高い。  
天孫降臨が九州で起きるのは、  
高天原勢力 = 九州の王権  
(倭国の中心) という歴史的記憶  
を反映していると読むことができる。

### ③ 畿内政権 (大和王権)

九州の勢力が東へ移動し、  
畿内に新たな政治中心を築いた。  
これが記・紀の「神武東征」に相当。

# 3. なぜ「記・紀」は 「九州→畿内」の移動を 神話化したのか

- 天皇家の正統性を「畿内起源」としたかった
- 九州の王権（卑弥呼政権・倭の五王）を歴史から消したかった
  - 畿内政権が後発であることを隠したかった

そのため、

**九州の王権の記憶を“天孫降臨”という神話に変換し、  
畿内への移動を“神武東征”として物語化した。**

# まとめ

**出雲政権の後、  
九州に強力な王権（倭国の中心）が存在し、  
その勢力が後に畿内へ進出したという歴史的記憶が、  
「国譲り → 天孫降臨 → 神武東征」  
という神話構造に変換された。  
つまり、神話の順序は、  
列島の政治勢力の交代と移動を  
象徴的に描いたものと解釈できる。**

# Ⅲ

**漢籍のキーワードで見る  
「倭国から日本国へ」**

# 楽浪海中有倭人

『漢書』地理志（前漢の正史、編者は班固）  
中国正史における倭人の現存最古の記録である。  
編者の班固が生きた1世紀頃の  
「倭人」に対する認識である。

# 漢委奴国王

後漢書・倭伝には  
建武中元二年（57）に奉賀朝貢した倭奴国王に対して  
後漢光武帝が印綬を与えたことが記されている。

**天明四年（1784年）志賀島から発見された  
「漢委奴国王」の金印が該当する可能性が高い。**

# 万二千余里

魏志倭人伝には、「自郡至女王国万二千余里」とあり、  
帯方郡から女王国までの距離が「万二千余里」と明記。  
倭人伝は対馬と壱岐の間約 1 0 0 k m を「千余里」と記す。  
一里が 1 0 0 m 弱の換算で描かれていることは明確である。  
帯方郡から女王国までの「万二千余里」は約 1 2 0 0 k m。  
女王国は九州島の北半分におさまることになる。

**魏志倭人伝に記されたキーワード「万二千余里」は、  
卑弥呼が支配する女王国が九州島内にあることを示す。**

# 渡平海北九十五国

宋書倭国伝には、有名な「倭王武の上表文」が記載されている。

キーワードは上表文の中にある「渡平海北九十五国」、

「渡りて海北を平ぐること九十五国」

海北にある韓半島内の95国を平定した、という意味。

韓半島を「海北」と言えるのは九州。

近畿地方から韓半島は「真西」に当り「海北」ではない。

**「渡平海北九十五国」は**

**倭の五王が活躍した五世紀に宋と交渉していた**

**倭国の中心は九州島に存在していたことを示している。**

# 有阿蘇山

隋書倭国伝は、隋からの使者が阿蘇山を見たことを記す。

「有阿蘇山」

倭国の社会や人々を観察している文中に記されていて、  
噴火している様子がリアルに描かれている。

倭国の中心は阿蘇山がみえる場所  
あるいはその近辺であるということが出来る。

**隋の使者が訪れた場所は九州である。**

**以上は  
倭国の中心が九州にあったことを  
示している。**

# 日本国者倭国之別種也

旧唐書倭国日本国伝にはじめて日本国が登場する。

「日本国者倭国之別種也」。

日本国が、これまでの倭国とは「別種」とであると記す。

**旧唐書に初めて登場する日本国は、大和朝廷である。**

## 最後に

**古代史の勉強においては、  
定期的に  
マクロ的な見直し・確認を  
行うことも必要だと思います。**

## マクロ的に見た「倭国から日本国へ」

2026.3.28 橘高 修

### 【要旨】

7世紀までの古代史を「倭国から日本国へ」の視点でマクロ的にまとめてみた。

一言で言ってしまえば、「日本国は倭国の別種なり。」ということにつけるのだが、どう別種なのか、どこが同じでどこが違うのか、倭国はどこで何をして、日本国はもともと何だったのか、などと思えば深まっていく。古代史については、すでに個々において詳細な先行論文が星の数ほど発表されている。ここでは微細な部分にこだわらないで弥生時代頃から7世紀までを俯瞰することを目的に構成してみた。混乱しそうになった時に、いちどもどってみることができるフレームになっていればよいと思う。

### I. 日本列島に存在した国家 or 王朝 or 集団

#### ● 出雲・九州・畿内と吉備や丹後や越前や尾張などの有力な勢力との関係

〈列島は「単一国家」ではなく、複数の地域国家の集合体だった〉

- ・九州（邪馬台国・倭の五王の中心）
- ・出雲（山陰の海上ネットワーク国家）
- ・吉備（瀬戸内の巨大古墳文化圏）
- ・丹後（日本海交易国家、王墓級古墳）
- ・越前（北陸の海上勢力、渡来系文化の中心）
- ・尾張（東海の軍事・交易勢力）
- ・畿内（後発のヤマト政権）

〈各勢力の概要〉

#### 出雲（山陰海上ネットワークの宗教・政治中心）

- ・荒神谷・加茂岩倉の青銅器群
- ・国譲り神話＝政治的服属の神話化
- ・倭国連合の一角だった可能性

#### 九州（倭国の中心：卑弥呼・倭の五王・多利思北孤）

- ・魏志倭人伝・宋書倭国伝の舞台
- ・白村江敗戦まで強力な政治中心
- ・記紀は九州の政治史をほぼ削除

#### 吉備（瀬戸内の巨大勢力）

- ・箸墓古墳に匹敵する規模の古墳群
- ・吉備津彦命の神話＝征服の物語
- ・鉄器生産・軍事力・海上交通の中心

### 丹後（日本海交易国家）

- 齊宮山古墳・神明山古墳など巨大古墳
- 渡来系文化の集積地
- 丹後王国（丹後王墓群）と呼ばれる独自勢力

### 越前（北陸の海上勢力：渡来文化の玄関口）

- 渡来系技術者・工人の集積
- 北陸道の軍事・物流拠点
- 出雲・丹後と連動する日本海ネットワーク
- 大宝律令以降は北陸道の要衝として重視

### 尾張（東海の軍事勢力）

- 尾張氏は武器製造・軍事力で突出
- ヤマトタケル神話＝尾張との婚姻関係
- 熱田神宮＝三種の神器の一つ（草薙剣）を保持

### 畿内：後発の政治勢力（最終的な統合者）

- 古墳の巨大化は4世紀後半以降
- 九州・吉備・出雲・丹後・尾張を吸収
- 記紀で「万世一系」の物語を構築

→ 列島の多元勢力を統合して“日本国”を形成

#### 〈これらの勢力はどのように統合されたのか？〉

- 出雲の征服（国譲り神話）：宗教権威の吸収。
- 九州勢力の吸収（天孫降臨・神武東征）：倭国の政治中心の継承。
- 吉備の軍事統合（吉備津彦神話）：軍事力の取り込み。
- 丹後の外戚化（丹後王家の皇后）：婚姻による政治統合。
- 尾張の軍事・神器統合（草薙剣）：軍事・祭祀の統合。
- 越前の技術・物流統合：律令国家の基盤整備。

#### 〈倭国と日本国の関係をこの枠組みで再解釈すると？〉

- 倭国＝九州中心の広域連合国家（3～7世紀）
- 日本国＝畿内中心の中央集権国家（7世紀後半～）

その間に、出雲・吉備・丹後・越前・尾張などの地域国家が連合・対立・婚姻・征服を通じて統合されていった。

倭国→日本国の転換は、列島の多元勢力がヤマト政権のもとに統合される「国家形成のプロセス」だった。

## II.神話から見る大きな流れ

### 〈国譲りと天孫降臨〉

記紀神話において、高天原勢力は出雲に「国譲り」をさせた後、九州へ「天孫降臨」している。出雲政権の後、高天原勢力が九州に進出したととらえることができるだろうか？

### 〈神話の順序は「政治勢力の移動」を象徴している〉

#### 記紀神話の流れ

出雲の大国主が国を譲る（国譲り）

→高天原勢力が九州に降臨する（天孫降臨）

→その後、東征して畿内へ向かう（神武東征）

### 〈歴史的再解釈：出雲政権 → 九州政権 → 畿内政権〉

#### ① 出雲政権（山陰）

弥生～古墳初期にかけて、出雲は強力な青銅器文化と海上ネットワークを持つ政治体だった。記紀が「国譲り」として描いたのは、出雲政権の衰退・服属の記憶と考えられる。

#### ② 九州政権（倭国の中心）

魏志倭人伝の卑弥呼政権、倭の五王政権など、3～5世紀の倭国の中心は九州にあった可能性が高い。天孫降臨が九州で起きるのは、高天原勢力＝九州の王権（倭国の中心）という歴史的記憶を反映していると読めます。

#### ③ 畿内政権（大和王権）

九州の勢力が東へ移動し、畿内に新たな政治中心を築いた。記紀の「神武東征」に相当。

### 〈なぜ記・紀は「九州→畿内」の移動を神話化したのか〉

- ・天皇家の正統性を「畿内起源」としたかった
- ・九州の王権（卑弥呼政権・倭の五王・多利思北孤）を歴史から消したかった
- ・畿内政権が後発であることを隠したかった

そのため、九州の王権の記憶を“天孫降臨”という神話に変換し、畿内への移動を“神武東征”として物語化した。

### 〈まとめ〉

●出雲政権の後、九州に強力な王権（倭国の中心）が存在し、その勢力が後に畿内へ進出したという歴史的記憶が、「国譲り → 天孫降臨 → 神武東征」という神話構造に変換された。つまり、神話の順序は、列島の政治勢力の交代と移動を象徴的に描いたものと解釈できます。

### Ⅲ.漢籍のキーワードで見る「倭国から日本国へ」

#### 〈楽浪海中有倭人、分為百餘國〉

中国正史である『漢書』地理志（前漢の正史、編者は班固）における倭人の現存最古の記録。編者班固が生きた1世紀頃の「倭人」に対する認識である。

#### 〈漢委奴国王〉

後漢書・倭伝には建武中元二年（57）に奉賀朝貢した倭奴国王に対して後漢光武帝が印綬を与えたことが記されている。

天明四年（1784年）志賀島から発見された「漢委奴国王」の金印が該当する可能性が高い。

#### 〈万二千余里〉

魏志倭人伝には、「自郡至女王国万二千余里」とあり、帯方郡から女王国までの距離が「万二千余里」と明記。倭人伝は対馬と壱岐の間約100kmを「千余里」と記す。一里が100m弱の換算で描かれていることは明確である。帯方郡から女王国までの「万二千余里」は約1200km。女王国は九州島の北半分におさまることになる。

魏志倭人伝に記されたキーワード「万二千余里」は、卑弥呼が支配する女王国が九州島内にあることを示す。

#### 〈渡平海北九十五国〉

宋書倭国伝には、有名な「倭王武の上表文」が記載されている。キーワードは上表文の中にある「渡平海北九十五国」、「渡りて海北を平ぐること九十五国」

海北にある韓半島内の95国を平定した、という意味。韓半島を「海北」と言えるのは九州。近畿地方から韓半島は「真西」に当り「海北」ではない。

「渡平海北九十五国」は倭の五王が活躍した五世紀に宋と交渉していた倭国の中心は九州島に存在していたことを示している。

#### 〈有阿蘇山〉

隋書倭国伝には、隋からの使者が阿蘇山を見たことを示す記述がある。倭国の服飾、刑罰、文化、風習、気候を著した後に、「有阿蘇山」と記される。倭国の社会や人々の観察をしている文脈の中でこの言葉が登場していて、噴火している様子がリアルに描かれている。倭国の中心は阿蘇山がみえる場所あるいはその近辺であるということが出来る。倭国の使者が訪れた場所は九州である。

#### 〈日本国者倭国之別種也〉

旧唐書倭国日本国伝にはじめて日本国が登場する。

「日本国者倭国之別種也」。

日本国が、これまでの倭国とは「別種」とであると記す。

旧唐書に初めて登場する日本国は、大和朝廷である。